2017年3月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第482号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

横浜の夫婦ふたり出版社「星羊社」
地元の人が意外に感じる情報を

文・星羊社代表－星山健太郎

出版社を立ち上げた経緯

横浜の伊勢佐木町にある古いビルに事務所を構え、星羊社を会社として設立してから3年半が経とうとしている。

現在編集長を務める成田希と一緒に事業を始めることにしたときに、我々が選んだのは「出版」というジャンルだった。

折しも出版不況や急速に進む本の電子化が騒がれていた頃で、周囲からはいろいろと心配の声をいただいたが、当人たちはそこまで悲観はしていなかった。

というのも、「出版不況」というのはある程度の規模の出版社が、本を取り巻く環境の変化により売上が減少していることを指したものであり、小規模の出版社にはそこまであてはまるものではないし、実際に本に触れて読むという行為を大切にし、本を収集することを楽しみとしている周りの本好きを見ていると、将来的にも紙媒体がなくなることはないと考えていたからだ。

また、横浜市は370万もの人口を抱える大きな都市なのに、地元に根ざした形での情報発信が少ないように感じていたので、できたばかりの弱小出版社でもやっていけるチャンスはあるのではないかという目論見もあった。

どんな情報を本にしたいのか

まず、本を出版するにあたり発信したいと思ったものは、地元の目線から見た「素顔の横浜」。

横浜は、海あり山あり畑ありの多種多様な顔を持った都市であるが、「おしゃれな街」というイメージで取り扱われることが多いので、横浜の下町にクローズアップしてみたかった。

『横濱市民酒場グルリと―はま太郎の横濱下町散策バイブル』／はま太郎10号までの連載記事を再編集＋書きおろし記事も加えた一冊。これを読めば「市民酒場」がわかる！／2015年12月15日発売

もう一つは「地元の人が意外に感じる情報」。

例えば、横浜は「～の発祥の地」としてよく語られ、地元の人も認識しているが、それが一つの常識としてとどまっていて、背景や真偽にまで言及されることが少ない。

もっと一つの事象を深く掘り進めることによって、長年横浜に住んでいるような人でも知らなかった情報を発信できれば、面白がってもらえるのではないかと考えたのだ。

この二つをうまく表現するネタを考えていたときに出会ったのが「市民酒場」だった。

市民酒場との出会い

「市民酒場」とは、昭和13年に横浜で結成された飲食店組合に加盟していた飲食店のことをいう。

横浜の飲兵衛のあいだでは、市民酒場は看板にその文字が明記されている3軒しか残っていないというのが常識になっていた。

会社を立ち上げて間もなくの頃、そのうちの1軒である「常盤木」で飲んでいたときに、店主がいった何気ない一言がきっかけだった。「実はね、市民酒場は3軒だけじゃないんだよ。」

聞けば市民酒場は、そのほとんどが横浜の下町にあるという。

地元の人も知らない意外性と、下町の魅力を表現するにはうってつけのネタだと思った。

単に地域の情報を網羅的に発信するのは小規模出版社としては難しいと考えていたので、市民酒場のコーナーを軸に「酒」を本のテーマとすることに決め、2013年12月に横浜の民衆文化誌『はま太郎』を創刊した。

市民酒場は戦前創業の老舗が多かったことや、編集部が入居したのが築90年を超えるビルだったことで、横浜の歴史を身近に感じられる環境のもと、自然と「酒」と「下町」に加えて「歴史」の要素も加わり、独りで飲むときにじっくりと味わうツマミのような、「読む肴」という本のコンセプトが固まっていった。

小規模出版社としての生き方

ソフトの発達により、机とパソコンさえあれば、小さいオフィスでも本は作ることができるし、小規模出版社だからこそ自由にやれるというメリットはある。

しかし、小規模出版社としてやって

▲初代の四郎さんは組合創設者。元祖市民酒場の「忠勇」。
読者が想像を膨らませられるように、各店舗の現在の様子は写真ではなくイラストで表現した。

▲ここ「常盤木」で市民酒場企画が生まれた。ご店主の哲郎さんはいわば『はま太郎』生みの親。
初めての人でも行きやすいように、各店舗の名物つまみとお店の方のキャラクターを紹介した。

いくには、当然ながらいくつもの問題に立ち向かう必要があった。

まずは、流通の問題。本をどのようにして読者に届けるのか。

幸いなことに、酒場で知り合った人の紹介で事務所近くの有隣堂伊勢佐木町本店には置いてもらえたが、取扱店のほとんどが野毛にある知り合いの飲食店だけという状況がしばらくは続いた。

できたばかりの出版社で、知名度が全くないのだから仕方ない。

自分たちのことを知ってもらうためにはどうしたらいいのかと考えた結果、2ヶ月に1冊のペースで本を出し続けることにした。本を出していくことで、星羊社という会社がどういう会社なのか、なにをやりたいのかということをわかってもらいたいと考えたのだ。

A5判60頁ほどのボリュームだったが、ほぼ自分たちだけで取材・執筆・デザイン・編集・校正を行うので、この頃は本を出して納品したらすぐに次の本を作る作業に入るというサイクルで、営業をしたり、『はま太郎』以外の本をつくったりする余裕がほとんどなかった。

『横濱市民酒場グルリと』刊行

『はま太郎』は隔月刊のペースで10号まで刊行し、次に取り組んだのは星羊社として初めての単行本の制作だった。

10回分の市民酒場企画があったので、これをベースにして再編集し、新しく取材した店も加えて、計18店舗の歴史を古い酒場写真とイラストを交えて紹介した。後半部分には地元在住の江戸川乱歩賞作家・山崎洋子さん、音楽家・批評家の大谷能生さんらに横浜下町の魅力をエッセイで綴ってもらい、2015年12月に刊行した。

市民酒場は、戦時中は配給のための酒場として、戦後は労働者の疲れを癒やす酒場として続いてきた経緯があり、本を作っていくうちに、各店舗の歴史を辿ることは、酒場を通して横浜の歴史を見つめ直すということでもあると気づいた。一つのテーマで本を作ることにより、新しい見え方が生まれてくるのは自分でも新鮮だった。

モノクロ中綴じでミニコミらしい見た目だった10号までの『はま太郎』から一新して、『横濱市民酒場グルリと』はオールカラーで200頁、初めての背表紙もついた。地方・小出版流通センターと契約し、全国の書店でも扱えるようにしたことで、横浜だけでなく、東京や関西などからも反響があった。

赤ちょうちんの似合う昭和な雰囲気の色濃く残る飲み屋街や、酒屋の角打ちがあるような横浜の下町の様子は、他の地域の人からは新鮮に映ったのかもしれない。

地元の人や元々住んでいた人以外にもアピールしていけるのではないかという手応えを得ることができた。

これからの展望

この単行本の刊行で痛感したのが、小さい出版社は自分で話題を作っていかなければならないということである。

それには、本を出し続けていくことが一番大切だと感じた。続けていくことで、人との繋がりが拡がり、取材がやりやすくなったり、イベントを組めるようになったりと、できることが徐々に増えてきたからだ。

特に同じように小規模でやっている出版社の方との繋がりを拡げていきたい。

「地元に根ざした出版社の本を読んでその地域を知る」という面白さを、各地の出版社を集めてイベントを行うなどして紹介できたらと考えている。

＊

（ほしやま　けんたろう・星羊社代表）

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率8%）表示です。

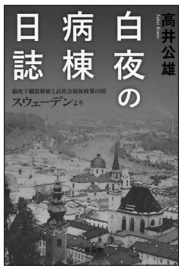
『椎名誠自走式マガジン　ずんがずんが１』●ずんがずんが編集部編

１位お通し、２位ポイントカード、３位『なんとかガール』『なんたら男子』などの流行言葉……。これは何かと言えば、編集長と編集部員が私見と偏見で選んだズバリ「こんなものいらない！」ランキング。椎名誠が企画・プロデュースした「とつげき！シーナワールド！！」が「「ずんがずんが」という名称でリニューアル。子どもが幼い頃によく読んであげた絵本のひとつにあった言葉に因んでいる。

この特集１が「こんなものいらない！」で、他にも47都道府県別や世界各国の不要物も列挙されているし、いらないがテーマの小説やエッセイや写真も盛り沢山。特集２はスピリチュアル入門編でスタッフがヒプノセラピー（催眠療法）など６つの世界をちょこっと体験し、とつげきのポリシーは不変である。カラーページは「物より心の持ちようが大事」とするチベットの人々の豊かな表情と琉球はりこ作家の豊永盛人の作品で彩られ、シーナワールドの魅力に溢れている。

◆1404円・Ａ５判・141頁・**椎名誠旅する文学館**・東京・2016/12刊・ISBN9784908920073

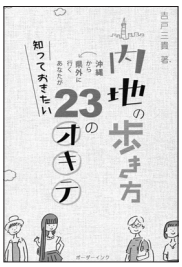
『白夜の病棟日誌　－脳死下臓器移植と高社会福祉政策の国スウェーデンより』●高井公雄著



著者は30年の経験を有するベテランの泌尿器科医。若い日、スウェーデンで専門の腎移植のみならず、脳死と臓器提供を学び、手術も経験した。同国は知られるように、標準消費税25％の高負担・高福祉国家である。同国との比較を通して、高齢化が急激に進む我が国の医療システムの在り方、脳死と臓器提供、TPPと国民皆保険制度、社会福祉と勞動環境、さらに、同一職種・同一賃金や移民、イスラム問題に至る社会の今日的な課題を縦横に考察する。両国の根本な違いは、スウェーデンには競争社会の概念がないこと、また、我が国に透析患者が異常に多く、反面、脳死移植が一向に進まない要因は我が国の死生観にあるとの指摘には肯かされる。スウェーデンを美化するのではなく、この激動期に国としてどうあるべきかを考えさせてくれる。テーマは重いが、文章はユーモアに溢れている。巻末に付された脳死と移植医療に関する論文も簡明で、裨益されるところが大きい。

◆ 1080円・四六判・326頁・**花乱社**・福岡・2017/1刊・ISBN9784905327646

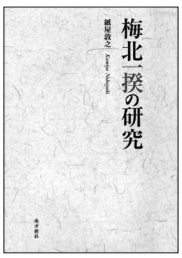
『内地の歩き方　－沖縄から県外に行くあなたが　知っておきたい２３のオキテ』●吉戸三貴著



志を抱いて沖縄から東京に出てきても、馴染めずに沖縄へ戻る選択をする人も結構いるようです。この本の著者もそんな一人でした。大学の４年間と新卒社会人の１年間、５年の東京生活に馴染めず、一度沖縄へ戻ることを決めています。31歳で再び上京するまでのブランクを考えると、内地と沖縄の文化の違いというのは意外に大きいのかもしれません。後に続く人にはそんなことで躓いてほしくない、ということでこの本は書かれました。アドバイスされていることは住居の選び方や酒席での振舞い方・人間関係のコツ等のちょっとしたことが中心です。はじめのうちは帰省をためらわない「帰省保険」という考え方など、経験者の実践的アドバイス集となっています。逆に迎え入れる内地(主に東京)人にとっては、沖縄からやってきた人の戸惑いがどこにあるのかを知ることができます。内地人が空気のようにまとっている習慣がどんなものか指摘されるのは、むしろ内地人にとって新鮮です。

◆ 1620円・四六判・158頁・**ボーダーインク**・沖縄・2017/1刊・ISBN9784899823131

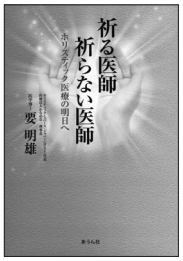
『梅北一揆の研究』●紙屋敦之著



豊臣政権による朝鮮出兵が始まった天正20年（1592）の６月15日、肥後で梅北一揆が起こった。首謀者は島津義久の家臣・梅北国兼。わずか三日で鎮圧されたが、豊臣政権に多大な影響を及ぼすことになる。これまで出兵拒否による反乱とみられてきたこの事件を、政権側と在地領主層との権力闘争の一環であると著者は位置づける。国兼ら各地の地頭クラスの在地領主が主要メンバーであった。かれらが率いたのが「悴者（かせもの）」と呼ばれる島津氏配下の上層農民＝地侍層である。秀吉をして「悪逆之棟梁」と言わしめたかれらは太閤検地による兵農分離の対象であった。しかし、悴者は島津氏の陪臣として政治的な役割を担っており、財政難の島津氏は軍役もかれらに依存していた。義久の弟・歳久の悴者が一揆に加わっていたため歳久は自殺に追い込まれる。これをきっかけに豊臣政権や義久・義弘の大名権力は強化、太閤検地の実施が促進され、近世的知行体制へと再編される。

◆ 4104円・Ａ５判・249頁・**南方新社**・鹿児島・2017/1刊・ISBN9784861243509

『祈る医師　祈らない医師　ーホリスティック医療の明日へ』●要　明雄著



著者は本書の中で、近代外科医学の祖と言われる十六世紀フランスの外科医、アンブロワーズ・パレの「我包帯す。神、癒し賜う」という言葉を紹介している。この言葉こそ、著者が実践するホリスティック医学の医療思想の中心に位置する〈自然治癒力〉のすべてを凝縮していると言うことができるだろう。ホリスティック医学とは、現代科学の成果に基づいた西洋医学と、心身一如の思想に基づく東洋的な代替医療を〈いいとこ取り〉した統合医療のことを言う。本書の中で著者は〈スピリチュアル〉〈サムシンググレート〉あるいは〈霊性〉といった言葉を使って自らの医療思想を語る。一般読者にとっては抵抗のある言葉かもしれないが、著者は甲状腺専門医として手術も行ってきた外科医であり、現代医療の否定論者などではないということはいくらでも強調する必要があるだろう。自身、心臓の中にステントと呼ばれる冠動脈拡張のための金属が埋め込まれているという。現代医学の恩恵を受けている患者のひとりなのだ。

◆1944円・四六判・275頁・**あうん社**・兵庫・2017/2刊・ISBN9784908115103

地方小出版流通センター　ジャンル別 新刊案内

2017年1月1日～31日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

価格は税込（消費税率8%）表示です。

【雑誌】

◆**ＳＰＲＩＤＥ**　ｖｏｌ．０８　渡辺　直明編　Ａ４　111頁　７３０円　下野新聞社［栃木］　978-4-88286-630-5　17/02

◆**ＧＲＥＥＮ　ＲＥＰＯＲＴ**　４４５　廣瀬　仁編　Ａ４　192頁　２８００円　地域環境ネット［埼玉］　978-4-905457-77-0　17/01

◆**子どもと昔話**　Ｎｏ．７０　小澤昔ばなし研究所編　Ａ５　79頁　８５３円　小澤昔ばなし研究所［神奈川］　978-4-902875-79-9　17/01

◆**かまくら春秋**　Ｎｏ．５６０　伊藤　玄二郎編　Ｂ６　92頁　３２０円　かまくら春秋社［神奈川］　978-4-7740-0702-1　16/12

◆**かまくら春秋**　Ｎｏ．５６１　伊藤　玄二郎編　Ｂ６　89頁　３２０円　かまくら春秋社［神奈川］　978-4-7740-0704-5　17/01

◆**道**　Ｎｏ．１９１　木村　郁子編　Ａ４　74頁　１２３４円　どう出版［神奈川］　978-4-904464-78-6　17/01

◆**くらしと教育をつなぐ　Ｗｅ**　Ｎｏ．２０６　中村　泰子編　稲邑　恭子編　Ａ５　80頁　８６４円　フェミックス［神奈川］　978-4-903579-75-7　17/02

◆**アーカイブズ学研究**　Ｎｏ．２５　日本アーカイブズ学会編　Ａ４　195頁　２７００円　岩田書院［東京］　978-4-503-21041-8　16/12

◆**関東近世史研究**　第７９号　関東近世史研究会常任委員会編　Ｂ５　83頁　２１６０円　岩田書院［東京］　978-4-503-21060-9　16/12

◆**日本宗教文化史研究**　第４０号　日本宗教文化史学会編　Ａ５　117頁　２９１６円　岩田書院［東京］　978-4-503-21043-2　16/11

◆**比較都市史研究**　第３５巻　第２号　比較都市史研究会編　Ｂ５　38頁　３２４０円　岩田書院［東京］　978-4-503-21040-1　16/12

◆**レコード・マネジメント**　Ｎｏ．７１　菅　真城編　Ａ４　89頁　３０８６円　岩田書院［東京］　978-4-503-21042-5　16/12

◆**仏事**　Ｎｏ．１９７　奥村　昇編　Ａ４　94頁　１６２０円　鎌倉新書［東京］　978-4-503-21058-6　17/02

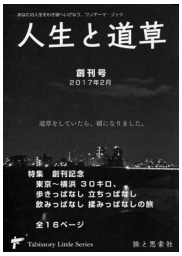
◆**月刊住職**　Ｎｏ．２１８　矢澤　澄道編　Ａ５　199頁　１４０４円　興山舎［東京］　978-4-908027-30-7　17/01

◆**月刊住職**　Ｎｏ．２１９　矢澤　澄道編　Ａ５　201頁　１４０４円　興山舎［東京］　978-4-908027-31-4　17/02

◆**子どもの文化**　Ｎｏ．５４９　片岡　輝編　Ａ５　47頁　３１３円　子どもの文化研究所［東京］　978-4-503-21035-7　17/01

◆**子どもの文化**　Ｎｏ．５５０　片岡　輝編　Ａ５　47頁　３１３円　子どもの文化研究所［東京］　978-4-503-21057-9　17/02

◆**書２１**　Ｎｏ．５９　澤田　博史編　Ａ４　96頁　２１６０円　匠出版［東京］　978-4-925212-66-3　16/12



◆**人生と道草**　創刊号　廣岡　一昭編　Ａ５　16頁　５００円　旅と思索社［東京］　978-4-908309-04-5　17/02

◆**東京かわら版**　Ｎｏ．５２１　佐藤　友美編　204mm × 108mm判　146頁　５００円　東京かわら版［東京］　978-4-503-21055-5　17/01

◆**こどもとしょかん**　第１５２号　東京子ども図書館編　Ａ５　31頁　７６７円　東京子ども図書館［東京］　978-4-503-21053-1　17/01

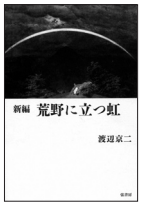
◆**俳句四季**　Ｎｏ．４７４　西井　洋子編　松尾　正光編　Ｂ５　160頁

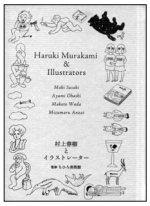
売行良好書

期間：2017年1月15日～2月14日

［出荷センター扱い］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『あひる』1404円・書肆侃侃房　(2)『新編　荒野に立つ虹』2916円・弦書房　(3)『村上春樹とイラストレーター』1944円・ナナロク社　(4)『赤ずきんとオオカミのトラウマ・ケア』1944円・アスクヒューマンケア　(5)『井伊家十四代と直虎』1944・円・サンライズ出版　(6)『不登校は１日３分の働きかけで９９％解決する』864円・リーブル出版　(7)『はじめてでも、かんたん。手作りアクセサリー』1382円・ｒｅｐｉｃｂｏｏｋ　(8)『ブックトークのきほん』648円・東京子ども図書館　(9)『放浪・廻遊民と日本の近代』2376円・弦書房　(10)『平成の湯治宿』1620円・九州人　(11)『加計呂麻島　昭和３７年／１９６２』3780円・南方新社　(12)『三江線ＢＯＯＫ』1296円・ハーベスト出版





［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『昭和プロレスマガジン　４１』1000円・昭和プロレス研究室　(2)『本の雑誌　４０５号』720円・本の雑誌社　(3)『東京かわら版　２月号』500円・東京かわら版　(4)『もう一度倫敦巴里』2376円・ナナロク社　(5)『おすすめ文庫王国２０１７』820円・本の雑誌社　(6)『唐獅子株式会社』2160円・フリースタイル　(7)『あひる』1404円・書肆侃侃房　(8)『信濃中世武家伝』1512円・信濃毎日新聞社　(9)『新編　荒野に立つ虹』2916円・弦書房　(10)『丹沢登山詳細図』972円・吉備人出版

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『忘れられた人類学者』2160円・忘羊社　(2)『きみを嫌いな奴はクズだよ』2052円・書肆侃侃房　(3)『社会的連帯経済入門』1620円・中国書店（集広舎）　(4)『遠藤周作と『沈黙』を語る』864円・長崎文献社　(5)『パスポート学』3456円・北海道大学出版会　(6)『北海道いい旅研究室１５』710円・海豹舎　(7)『一畑電車写真集』2160円・今井出版　(8)『つまみ細工』2160円・かりん舎　(9)『新編　荒野に立つ虹』2916円・弦書房　(10)『坪内稔典百句』864円・創風社出版　(11)『三江線ＢＯＯＫ』1296円・ハーベスト出版

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

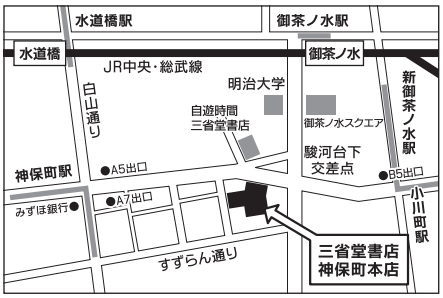
トピックス ―― ★★★

▼昨年１２月初旬に青森県で開設した市営書店「八戸ブックセンター」を隣県の地方出版社社主が２日にわたり視察した感想が届きました。この書店は、市長が政策公約で掲げた「本を読む人を増やす、本を書く人を増やす、本でまちを盛り上げる」という「本のまち八戸」宣言の一環としてつくられた書店です。年間経費６千万のうち売上２千万を予定し、赤字分の４千万は税金で穴埋めするそうです。雑誌・コミック、新書などの売れ筋は置かず、書店や図書館からこぼれ落ちた入手の難しい「良書」を約8000冊並べています。このような本たちは「公共性」があるという判断だそうですが、訪れた地方出版社主によれば、「良書」という行政の「本を選ぶ基準」がよくわからない。また市負担４千万円の根拠となっている「売上２千万」もあいまい。売上けなのか利益なのか？　もし利益なら２千万稼ぐには１億近く売上が必要で、8000冊の本では難しいでしょう。売れなければ赤字が増えて市民の負担となるわけです。本の現状に対する認識が楽天的すぎるのでは！と考えてしまうと言います。そして、公共のお金を使わなければ「本は自立」出来ない時代なのか！と嘆きます。
＊地方・小出版流通センター通信No.１３８３（2017/02/10）より

郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。基本的にメール便は、一冊２１０円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから３～４日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合せ下さいませ。
◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせて頂きます。

★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

BOOKS SANSEIDO
三省堂書店
営業のごあんない
神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。